

## 羞恥傾性と自己意識

— 後期青年期における一検証 —

堤 雅 雄\*

Masao TSUTSUMI

### The Relation between Dispositional "Shuhti" (Shame) and Self-consciousness in Late Adolescence

日常生活の中で我々は、何の媒介もなしに自分を意識することは少ない。ふと我にかえる瞬間や、自分を取り戻す瞬間を除けば、大半を自ずからなる状況の流れに身を委ねて生きている。思う、語る、振る舞うといった意志的な行為の中であっても、それは必ずしも例外ではない。

我々が自分を意識するということは、Sartre(1943)のいう対自存在、ないしは対他存在への転化を意味するが、それは常に、自己に対する否定的契機としての有形、無形の「他者」存在を前提としている。従って、他者存在によって喚起される自己への意識の覚醒は、しばしば自己の動揺をもたらすのである。

心理学において、「自己」という極めて抽象的な概念を本格的な鍵概念として取り上げるようになったのは、おそらくRogers,C.の「自己概念」理論に代表される臨床の領域からであろう。しかしそこでは、自己を対自的次元で、すなわち個体内完結的にとらえようとする傾向が強く、自己が自己として成立する基盤である他者存在の重要性に対する認識は比較的希薄であった。

対他存在としての自己の諸相が、心理学の研究対象としてとりあげられるようになったのは比較的最近であるが、これを担う研究者の多くが、実験社会心理学の立場から臨床的問題に関心を寄せる、実験臨床社会心理学とも呼ぶべき領域の人々であるのは示唆的である。例えばBuss(1980)は、自己に対する意識の覚醒状態、俗にいう「自意識」(self-awareness)状態を、社会的諸状況において惹起される恥、困惑、シャイネス、聴衆不安などの対人不安(social anxiety)との関係で論じながら、

彼の自己意識理論を展開している。この発展として彼は最近、「自意識的シャイネス (self-conscious shyness)」という概念も提起している(Buss, 1986)。Bussらの流れをくんで、アメリカにおけるシャイネス研究も近年盛んになっている(Jones, Cheek & Briggs, 1986)。

自分を意識することは、直接的あるいは間接的に、眼前のあるいは想像的な他者を意識することと相即的である。従って、いかなる社会的関係がいかなる意識の発現形態を招くかという、状況要因に関する研究が求められることとなる。

一方で、自己を意識する傾向には顕著な個体差がある。この個体差をひとつの人格特性、すなわち自己意識特性(self-consciousness)として測定する尺度も開発されており、私的自意識、公的自意識、対人不安という3つの下位尺度が見出されている(Fenigstein, Scheier & Buss, 1975)。この自己意識尺度については、近年日本においても邦訳版が作成され、尺度としての妥当性の検討がなされている(押見、渡辺、石川、1985、水田、1987)。

他人の眼を意識する、「世間体」を気にするといった心性は、対人恐怖症とともに日本文化に特有のものという議論があるが、近年のアメリカでの研究例をみても、これらが必ずしも日本人に特殊であるとはいえず、程度の差こそあれ、文化を超えた普遍性を有することがうかがわれる(Zimbardo, 1977, 堤, 1986)。

人間存在の基底にある対他存在性と、そこから発する対人的感情の質には、たとえ文化が異なっても本質的な違いはないであろう。違いがあるとすればそれは、喚起された覚醒状態に対する言語的ラベリングに負荷された評価的ニュアンスと、それを規定する各文化固有の価値

\* 島根大学教育学部教育心理研究室

観である。

かつてかの文化人類学者、Benedict (1967) は、日本文化の特殊性を「恥の文化」と称し、彼らの「罪の文化」と対比させた。これに対し社会学者、作田 (1972) は、日本文化の本質は、恥というより、恥と罪とを媒介する「羞恥」にあると反論した。しかし、この「羞恥」に正確に対応する概念は、英語には見当たらない。

アメリカにおいて、自己意識の研究と平行して取り上げられた“shyness” (強いて訳せば「恥ずかしがりやであること」) の概念は、この意味で「羞恥」とは次の点で微妙に異なる。① shyness が基本的に可視的な社会的行動次元の特性概念であるのに対し、羞恥は行動以前の内面的感情次元の概念である。②前者には後者の持つ「私恥」(作田) という、罪の意識に近い要素が欠落している。さらに③前者が一般に、社会生活上克服すべき問題として、否定的に論じられるのに対し、後者は価値的には中立で、場合によってはむしろ美徳とみなされることさえある。

従って、羞恥心性を考えるには、否定的社会行動性の色彩の強い shyness よりも、その背景となる自己意識そのものとの関連から探っていったほうが、より生産的であろう。

本研究では、自己の存在性の本質である対他存在性を反映するという意味で極めて重要でありながら、未だほとんど心理学的な解明がなされていない羞恥心性について、これを測定する尺度を構成し、因子構造を分析するとともに、その基盤となる自己意識特性との関係を探ってみた。

## 方 法

### 被 験 者

被験者は、地方国立大学教育学部の青年心理学を受講する大学生、男子51名、女子89名、計140名。

### 手 続 き

被験者全員に、次に述べる2部からなる「自分のイメージについてのアンケート」と称した質問紙を配布し、各設問に対し、自分自身をふりかえりながら評定するよう求める。なお回答は、被験者の抵抗を小さくするため無記名とした。

### 質 問 紙

1. 自己意識尺度(SCS) ; Fenigstein らの原典の23項目を翻訳したものに、新たに作成した3項目を追加して、計26項目で構成される。回答は、自分にどの程度あてはまるかについて、「はい」から、「どちらかといえば

はい」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の5件法で求める。

2. 羞恥傾性尺度 ; 羞恥傾性の個人差をみるために、堤 (1983) の、自由記述から求められた羞恥感情生起場面を表わす31項目をもとに、文章表現を手直しして、新たに31項目の羞恥傾性尺度が構成された。被験者は各々の場面を想起し、どの程度「恥ずかしい」と感じるか、「非常に恥ずかしい」から「かなり恥ずかしい」、「やや恥ずかしい」、そして「恥ずかしくない」まで、単極的な4件法で答えることを求められる。

## 結果と考察

### 1. 羞恥傾性尺度

まず、尺度総体の因子構造を探るため、主因子解バリマックス回転による因子分析を行なった。

予備的に男女別に因子構造をみると、男子では第1因子として、自責感(項目8, 13)、劣位感(7, 6)、異性との交際(20, 10, 15)、単に他者の注意を引くこと(28, 1, 2, 12)など誘因は様々ながら、結果的にどう身を処してよいのか分からぬという当惑感を生じる項目が、第2因子には、外観の奇異さ(16, 21)、違和感(4, 22, 31)などによる「格好悪さ」感を表わす項目が、そして第3因子には、他人と違う自分の意識(17, 19, 22, 24, 2, 5, 26)と道徳的逸脱感(23, 18)が共存し、プラス方向であれマイナス方向であれ、標準からの逸脱感に関する項目の負荷量が高い。

これに対し女子は、特に上位2因子において男子とは異なった項目の組み合わせとなっている。

第1因子は、服装(21)や失敗などによる劣位性の発現(9, 6, 11, 7, 14, 22, 28)など、外面的な軽い恥辱感(みじめさ)を引き起こすという意味で共通な項目の並ぶ「軽恥辱感」因子、第2因子は、他者のまなざしを浴びることそれ自体への意識を示す項目(10, 12, 15, 4, 19, 24, 31, 20, 1)を主体とした、「被視感」とでも呼ぶべき因子と考えられる。第3因子は、集団の規範からの逸脱を表わす項目(23, 18, 3, 8)を上位に置く因子で、男子と重複する部分が多いが、男子より倫理的色彩が強い。

いずれの場合も、置かれた状況そのものの違いによる群化というよりは、その帰結として生起するであろう感情の質による群化を示しているようであり、その意味で男女の違いは、羞恥を生起する場面と、その帰結としての感情の間の因果関係における微妙な差違をあらわしていることになる。

ただ厳密には、男女を分けて因子分析を行なうに十分な標本数であるとはいえぬ（特に男子で）ため、上記の解釈には一定の限界がある。以降は男女を結合したデータについて述べる。

男女計140名について、固有値1.0158の第4因子以下を除き、3因子でバリマックス回転による因子分析を行なった結果を、各項目ごとの平均値を男女別に算出したものと併せて表1に示す。

第1因子は、道徳的逸脱(項目18, 23, 3), 奇異さによる被視感あるいはその予期(19, 16, 27, 28, 26, 24, 31, 17) という2要素を含むが、共通するのは集団の標準からの逸脱による「眼差し」の意識であろう。ほめられた時や、おしゃれをした時といった、必ずしも否定的とは限らぬ、「照れ」の意識を含むのは興味深い。

第2因子は、劣位性の意識(21, 7, 6, 9), 場との違和感(23, 30, 13, 4)の2要素を上位にもつ因子で、基底に他者からの評価の低下へのおそれが感じられる、否定的評価因子であると考えられる。

第3因子は、対異性場面(10, 15, 20, 5), 及び公表場面(12, 2, 1)で、必ずしも不快ではない当惑感を表わす因子と考えられる。なお、恥ずかしさよりもむしろ「くやしき」を表わし、共通性も低い項目14は削除すべきであろう。また8と25はいずれの因子にも分類不可能である。

全体的に、同一因子の中に異種の場面が含まれており、これらの状況において生じる羞恥感情の内包する「照れ」や「恥」、「罪」の意識など、複雑で微妙な心理まで分けいらなければ解釈が困難で、明確な分析結果とはならなかった。しかしこの輻輳性こそが羞恥の本質であると考えたほうが、むしろ妥当かもしれない(堤, 1983)。ちなみに、各下位尺度間の相関も比較的高いものになっており(後述, 表3参照), 羞恥傾性尺度総体が、因子的分析に必ずしもそぐわない、未分化で単一因子的な性格を有することが感じられる。

項目毎の性差については、第1因子に属する項目で、女子のほうが男子より高い反応を示している。

次に因子分析結果をもとに下位尺度を設定し、各下位尺度毎に評定値を合計して項目数で割った値を個人指標に、男女別の平均値を求め、表3に示す。男女間に有意差がみとめられたのは第1因子の下位尺度で、女子のほうが高い反応を示した。これらの結果からすれば、自他のまなざしの意識(羞恥心性の中核)は女子のほうが強いようである。もっともこれは、肯定反応の表出に対する抵抗が、女子のほうが弱いことによるのかもしれない。我々の文化では、女性が恥ずかしがることは男性に

比べ、それほど否定すべきことではないのである。

## 2. 自己意識尺度

参考までに、男女別に因子分析を行なってみたところ、因子構造における性差はほとんど認められなかった。

そこであらためて男女をまとめ、大学生サンプル(計140名)として主因子解の因子分析を行なった。固有値1.0031の第4因子以下を除き、固有値2以上の3因子についてバリマックス回転をした結果を、各項目の平均得点と併せ、表3に示す。

第1因子は対自的自己意識を表わす項目群(14, 17, 25, 22, 20, 7, 1, 2, 5, 3, 10)で、このうち2と7は、原典では公的自己意識(public self-consciousness)に含まれていたものだが、内容上この因子に入れても問題はなく、他は全て私的自己意識(private self-consciousness)項目である。

第2因子は対人緊張を表わす項目群(18, 13, 4, 26, 11, 9, 24)で、追加した24を除きすべて原典の対人不安(social anxiety)項目である。

第3因子は、新たに追加した16と6を除き、全て原典の公的自己意識項目であり、対他的自己意識項目群と呼ぶ。このように自己意識尺度では、Fenigsteinらの結果とほとんど一致する結果を得ることとなった。なお、項目8(空想癖)は、因子負荷量も小さく、共通性も低いため、今回の結果からはこの尺度から除外すべきであろう。

次に、因子分析結果に基づいて分類した下位尺度毎の評定値を男女別に平均し、表4に示す。性差は第3因子のみにみられ、女子のほうがわずかに高かった。これは鏡など、自己の容姿に対する意識の強さの違いによるものであろう。

## 3. 羞恥傾性と自己意識特性の相関関係

他者存在が自己意識の発展の否定的契機となることは先にも述べたが、これが冗じれば対人緊張となる。自己意識尺度の中に、第2因子(Fenigsteinらでは第3因子)として対人緊張因子が抽出されたのは、その意味で了解できる。

一方羞恥傾性尺度には、他者との差異から覚醒された自他のまなざしの意識(第1因子)と、それから喚起される当惑感(第3因子) - 必ずしも否定的感情とは限らぬ -、及び自己の価値の低下に対する予期(第2因子)が含まれている。

これら2つの尺度の間に、対自意識の覚醒、これと相即的な対他意識の覚醒、羞恥感情の生起、恥の意識に連

表1 羞恥傾性尺度の分析：大学生男女140名

項目 No	項 目 内 容	バリマックス回転後の因子負荷量(0.3以上)		
		第1因子	第2因子	第3因子
18.	自分が人間として未熟だと感じたとき。	0.619979		
23.	規則や約束事を守らなかったとき。	0.574572		
19.	みんなが自分を見ているのに気がついたとき。	0.521173		
3.	ひとに嘘をついたりひとをだましたりしたとき。	0.513150		
16.	破れた服やボタンのとれた服を着ていたとき。	0.471500		
27.	大勢のひとの前で苦手なことや、気が進まないことをさせられたとき。	0.469590		
28.	人前でおならが出してしまったとき。	0.461637		
26.	いつもよりとりわけおしゃれをしているとき。	0.460202		
24.	みんなの前でほめられたとき。	0.399578		
31.	着がえているところをひとにみられてしまったとき。	0.388287		
17.	一人だけひとと違うことをしていたとき。	0.380421		
29.	初対面の人と2人きりで話をしなければならないとき。	0.335043		
21.	他の人に比べて自分の服装がみそぼらしく思えたとき。		0.587499	
7.	ひとと比べて自分の能力が劣っていることがわかったとき。		0.542294	
6.	自分の欠点や弱点を人前でズバリと指摘されたとき。		0.493245	
9.	失敗して、人前で叱られたり、注意をうけたとき。		0.458989	
22.	みんなと話をしている場違いなことを言ってしまったとき。	0.393638	0.430448	
30.	性教育の授業などで性に関する話を聞くとき。		0.370940	
13.	自分が言い張っていたことが間違いだとわかったとき。	0.335676	0.358057	
11.	自分が秘密にしていたことをひとに知られたとき。		0.352491	
4.	町の中でつまづいて転んでしまったとき。		0.334814	
10.	好きだと思っているひとと目があってしまったとき。			0.654818
12.	自分の作文や絵、写真などをみんなに見せるとき。			0.528246
15.	すてきだと思っている人の前にでるとき。			0.516722
20.	異性と2人であるところを知り合いに見られたとき。			0.490249
5.	同じ年頃の異性がたくさんいる中に自分一人だけいるとき。	0.371718		0.451871
2.	他人に顔や体をじろじろ見られるとき。			0.417440
1.	大勢の人の前で自分の得意なことをしてみせるとき。			0.374627
25.	テレビのラブシーンを親といっしょに見たとき。	(0.247906)		(0.249097)
8.	思いがけずひとにすまないことをしてしまったとき。	(0.240079)	(0.288597)	
14.	みんなの前で他人にいじめられたり、ひやかされたとき。		(0.292917)	
固 有 値		5.8929	1.4813	1.4284

共通性の推定 (重相関の2垂による)	平均得点 (SD)		性差 (F値)
	男子(N=51)	女子(N=89)	
0.4888	2.33(0.93)	2.74(0.92)	NS
0.4777	2.18(0.87)	2.69(0.85)	11.5187*
0.3592	2.24(0.89)	2.70(0.79)	NS
0.3655	2.51(0.97)	3.12(0.82)	15.8442*
0.4760	2.30(0.76)	3.19(0.83)	39.1793*
0.4220	2.61(0.96)	2.78(0.91)	NS
0.4892	3.14(0.80)	3.74(0.55)	27.6496*
0.2909	1.67(0.71)	2.15(0.73)	14.1915*
0.3525	2.04(0.87)	2.30(0.90)	NS
0.3846	2.12(0.84)	2.79(0.85)	20.3758*
0.4927	2.45(0.88)	2.61(0.89)	NS
0.4197	2.45(1.05)	2.33(0.85)	NS
0.4373	2.29(0.78)	2.51(0.84)	NS
0.4511	2.61(0.92)	2.53(0.95)	NS
0.4443	3.16(0.86)	3.09(1.01)	NS
0.3821	2.80(0.85)	3.12(0.84)	NS
0.4456	2.61(0.85)	2.65(0.85)	NS
0.3815	1.75(0.77)	1.82(0.79)	NS
0.3906	2.96(0.92)	3.20(0.80)	NS
0.3555	3.25(0.77)	3.40(0.76)	NS
0.4088	3.02(0.93)	3.28(0.83)	NS
0.5154	2.55(0.94)	2.70(0.90)	NS
0.4248	2.18(0.91)	2.54(0.97)	NS
0.5046	2.51(1.07)	2.73(0.93)	NS
0.3895	2.10(1.01)	2.04(0.99)	NS
0.5148	2.98(0.86)	2.63(1.03)	NS
0.4660	2.78(0.78)	3.06(0.83)	NS
0.3220	2.35(0.95)	2.51(0.82)	NS
0.3898	2.14(0.83)	2.53(0.93)	NS
0.3980	3.00(0.92)	3.19(0.84)	NS
0.2909	2.73(0.83)	3.01(0.89)	NS

表2 自己意識尺度の分析；大学生男女計140名

項目 番号	項 目 内 容	原典での下位尺度
14.	私は、自分の心の奥の感情に、いつも注意を払っている。	private s. c.
17.	私は、常に自分がどうしてそのような行動をしたのか考慮している。	〃
25.	私は、何か困難にぶつかったときの、自分の心の動きに常に注意している。	〃
22.	私は、自分の気持ちの変化に敏感である。	〃
20.	私は、時々、自分自身を離れたところから客観的にみている自分を感じることもある。	〃
7.	私は、自分自身を相手にどのように伝えたらよいかということに気をくばっている。	public s. c.
1.	私は、自分がどんな人間であるのかいつも理解しようと努めている。	private s. c.
2.	私は、自分自身の行動のしかたに気をくばっている。	public s. c.
5.	私は、自分を反省してることが多い。	private s. c.
* 3.	私は、普段は、自分自身についてあまり意識していない。	〃
* 10.	私は、自分のことをあれこれと見つめ直すことはない。	〃
18.	私は、人前で話すとき、とても緊張する。	social anxiety
* 13.	私は、見知らぬ人とでも平気で話ができる。	〃
4.	私は、知らない人達と会うような新しい環境に慣れるのに時間がかかる。	〃
26.	私は、たくさんの人がいると緊張する。	〃
11.	私は、ちょっとしたことで、すぐにどぎまぎしてしまう。	〃
9.	私は、誰かに見られていると仕事に集中できない。	〃
24.	私は、人と目が合うと、自分のほうから視線をそらしてしまう。	(新規)
23.	私は、いつも自分の容姿について意識している。	public s. c.
15.	私は、いつも人に良い印象を与えようと気を使っている。	〃
21.	私は、人が私のことをどう思っているか気がかりである。	〃
16.	私は、ショウウィンドウにうつった自分の姿を思わず見てしまう。	(新規)
12.	私は、人からどのように見られているのかを意識している。	public s. c.
6.	私は、写真をとられるときには良く写ろうとする。	(新規)
19.	私は、でかける前には必ず鏡を見る。	public s. c.
8.	私は、自分が主人公となるような空想にふけることがよくある。	private s. c.

固 有 値

\*；逆転項目

表3 羞恥傾性下位尺度の平均得点（標準偏差）

	男子(n=51)	女子(n=89)	性差(F値)
第1尺度	2.3357(0.4732)	2.7597(0.4179)	30.2863**
第2尺度	2.7167(0.4545)	2.8452(0.5129)	2.2038
第3尺度	2.4930(0.5588)	2.6012(0.5541)	1.2269

\*\*；p&lt;.01

なる自己不安の生起といった一連の相互関係が推測される。そこで2つの尺度の各因子間の相関係数を求め、表5, 6, 7に提示する。

まず、各尺度内の下位尺度間の相互関係からみると、羞恥尺度では全ての組み合わせで中程度の有意な相関がみられ、因子としての独立性は低かった。これに対

バリマックス回転後の因子負荷量(0.3以上)			共通性	平均得点 (SD)		性差 (F値)
第1因子	第2因子	第3因子		男子 (n=51)	女子 (n=89)	
0.761340			0.6576	3.35(1.23)	3.48(1.01)	NS
0.735347			0.5873	3.24(1.09)	3.07(1.10)	NS
0.694481			0.5637	3.14(1.18)	3.39(1.01)	NS
0.678286			0.6153	3.45(1.10)	3.51(1.15)	NS
0.630576			0.4318	3.24(1.19)	3.40(1.39)	NS
0.601870		0.368566	0.5747	3.73(0.98)	3.84(0.94)	NS
0.529498			0.3905	3.65(0.98)	3.82(0.95)	NS
0.510298			0.4861	4.18(0.82)	3.93(0.86)	NS
0.437666		0.369454	0.5077	3.90(1.10)	4.16(0.82)	NS
0.420000		0.327419	0.3872	3.24(1.16)	3.76(1.03)	NS
0.405523		0.418198	0.5069	4.08(0.87)	4.27(0.72)	NS
	0.687465		0.5494	3.75(1.31)	3.72(1.13)	NS
	0.686565		0.6182	3.35(1.21)	2.76(1.29)	NS
	0.680719		0.5597	3.33(1.26)	3.02(1.34)	NS
	0.659150		0.5124	3.39(1.33)	3.10(1.27)	NS
	0.535566		0.3760	3.76(0.97)	3.63(1.16)	NS
	0.471996		0.4092	3.25(1.35)	3.34(1.22)	NS
	0.462130		0.3665	3.53(1.06)	3.25(1.12)	NS
		0.707814	0.5701	3.53(1.19)	3.88(1.00)	NS
		0.687462	0.5810	3.75(1.02)	3.67(0.91)	NS
		0.594246	0.5144	4.24(1.01)	4.06(1.03)	NS
		0.591495	0.5269	3.25(1.41)	3.89(1.19)	NS
0.346923		0.564913	0.5543	4.10(0.92)	4.07(0.86)	NS
		0.560364	0.4109	4.00(0.96)	4.30(0.92)	NS
		0.479717	0.3946	3.41(1.43)	4.40(1.06)	21.8510*
		0.327645	0.2762	3.20(1.39)	3.25(1.40)	NS
5.3963	2.8179	2.1602				

Bonferroni法による名義水準 \*;  $p < .05$ 

して自己意識尺度では、対自的自己意識尺度と対他的自己意識尺度の間だけに有意な相関がみられた。これらの傾向は男女間に共通していた。

本研究の主題である、2つの尺度間の関係はどうか。羞恥傾性の3つの下位尺度の総計点(すなわち、31項目中28項目の平均得点)を加え、相互の単相関をみてる

と、全体として羞恥傾性の第2下位尺度と自己意識の第1、第3下位尺度、羞恥の第1、第3下位尺度と自己意識の第2下位尺度の間に有意な相関が見られ、女子単独でも同様であった。これに対し男子では、全体的傾向は似ているが相関値は低めで、羞恥傾性第3尺度と自己意識第2尺度間を除き有意水準には達しなかった。

以上の単相関分析では、互いに内部相関関係にありうる複数の下位尺度間の錯綜した関係を解明するには限界がある。羞恥傾向の個人差は、自己意識のどの因子によって、どの程度説明できるのか、ステップワイズ法（変数増加法）による重回帰分析によってこの問いに迫ってみた。結果を表8, 9, 10に示す。

表4 自己意識下位尺度の平均得点（標準偏差）

	男子 (n=51)	女子 (n=89)	性差 (F値)
第1尺度 (対自的)	3.561 (0.7247)	3.693 (0.6394)	1.2346
第2尺度 (対人緊張)	3.482 (0.8290)	3.260 (0.7958)	2.4420
第3尺度 (対他的)	3.753 (0.8171)	4.038 (0.6373)	5.2573

一部を除いて羞恥傾性の各下位尺度は（羞恥総計を含め）、自己意識の第2尺度（対人緊張因子）を中心としたいくつかの下位尺度に、有意な回帰を示している。

男女を比較すると、女子の羞恥傾性において自己意識の第1尺度への有意な回帰がみられなかったのに対し、男子ではむしろ第3尺度への回帰が低い。全体として、羞恥傾性が自己意識の対人緊張因子とかなりの関係性を示すのは概念的近似性ゆえに当然だが、それ以外に、女子のそれが公的自己意識に一定程度規定されるのに対し、男子は相対的に私的自己意識の比重の方が高いという結果となったのはおもしろい。自己の対他存在性に対する意識の強さゆえに羞恥感情が生起するという傾向は、男子より女子の方が強く、少なくとも質問紙に回答するという次元での羞恥傾性も、女子の方がやや高いようである。

表5 羞恥傾性及び自己意識下位尺度間の相互相関（大学生男子、n=51）

	対人緊張意識	対他的自己意識	羞恥第1尺度	羞恥第2尺度	羞恥第3尺度
対自的自己意識	-0.2025	0.4686**	0.0812	0.2735	0.0529
対人緊張意識		-0.0290	0.1477	0.1807	0.5193**
対他的自己意識			-0.1927	0.1655	-0.1902
羞恥傾性第1尺度				0.5961**	0.4761**
羞恥傾性第2尺度					0.3945**

\*\* ; p &lt; .01

表6 羞恥傾性及び自己意識下位尺度間の相互相関（大学生女子、n=89）

	対人緊張意識	対他的自己意識	羞恥第1尺度	羞恥第2尺度	羞恥第3尺度
対自的自己意識	0.0893	0.2449*	0.0702	0.2162*	-0.0200
対人緊張意識		0.0372	0.3551**	0.1859	0.4009**
対他的自己意識			0.0364	0.3335**	0.1442
羞恥傾性第1尺度				0.4669**	0.4042**
羞恥傾性第2尺度					0.3753**

\* ; p &lt; .05, \*\* ; p &lt; .01

表7 羞恥傾性及び自己意識下位尺度間の相互相関（大学生男女計、n=140）

	対人緊張意識	対他的自己意識	羞恥第1尺度	羞恥第2尺度	羞恥第3尺度
対自的自己意識	-0.0393	0.3556**	0.1074	0.2443**	0.0175
対人緊張意識		-0.0169	0.1879*	0.1634	0.4269**
対他的自己意識			0.0217	0.2804**	0.0204
羞恥傾性第1尺度				0.5116**	0.4291**
羞恥傾性第2尺度					0.3880**

\* ; p &lt; .05, \*\* ; p &lt; .01

表8 羞恥傾性尺度得点を目的変数とした重回帰分析；大学生男子（n=51）  
（ステップワイズ法による最終ステップ）

目的変数	説 明 変 数			分散比	重相関係数 決定係数
	対自の自己意識尺度	対人緊張意識尺度	対他の自己意識尺度		
	偏回帰係数 標準偏回帰係数	偏回帰係数 標準偏回帰係数	偏回帰係数 標準偏回帰係数		
羞恥傾性 第1尺度得点	—	—	—	—	
第2尺度得点	0.018 0.3233	0.019 0.2461	—	3.68	0.3646 0.1329
第3尺度得点	—	0.050 0.5193	—	18.09	0.5193 0.2697
羞恥 総計点	0.056 0.3706	0.090 0.4345	-0.055 -0.2625	5.09	0.4952 0.2453

表9 羞恥傾性尺度得点を目的変数とした重回帰分析；大学生女子（n=89）  
（ステップワイズ法による最終ステップ）

目的変数	説 明 変 数			分散比	重相関係数 決定係数
	対自の自己意識尺度	対人緊張意識尺度	対他の自己意識尺度		
	偏回帰係数 標準偏回帰係数	偏回帰係数 標準偏回帰係数	偏回帰係数 標準偏回帰係数		
羞恥傾性 第1尺度得点	—	0.027 0.3551	—	12.55	0.3551 0.1261
第2尺度得点	—	0.016 0.1729	0.038 0.3271	7.06	0.3756 0.1411
第3尺度得点	—	0.040 0.4009	—	16.66	0.4009 0.1607
羞恥 総計点	—	0.082 0.3933	0.056 0.2148	11.23	0.4551 0.2071

表10 羞恥傾性尺度得点を目的変数とした重回帰分析；大学生男女（n=140）  
（ステップワイズ法による最終ステップ）

目的変数	説 明 変 数			分散比	重相関係数 決定係数
	対自の自己意識尺度	対人緊張意識尺度	対他の自己意識尺度		
	偏回帰係数 標準偏回帰係数	偏回帰係数 標準偏回帰係数	偏回帰係数 標準偏回帰係数		
羞恥傾性 第1尺度得点	—	0.016 0.1879	—	5.05	0.1879 0.0353
第2尺度得点	0.012 0.1722	0.015 0.1740	0.021 0.2221	6.94	0.3644 0.1328
第3尺度得点	—	0.0402 0.4269	—	30.75	0.4269 0.1822
羞恥 総計点	0.027 0.1638	0.073 0.3432	—	11.17	0.3744 0.1402

### 全体的考察

本研究の第1の目的は、羞恥傾性尺度の編成とその因子分析的吟味であり、第2はやや副次的であるが、日本語版自己意識尺度の因子分析及び原典版との比較、第3は最終目的である、羞恥傾性と自己意識の各下位尺度間の相互関係についての検証であった。

第1の目的については、羞恥感情そのものが有する錯綜性ゆえか、各因子を構成する項目の群化に項目内容自体の共通性があまりみられず、そこから派生する心理状態にまで踏み込んでの解釈とならざるを得なかった。しかし明確な因子構造を抽出したとはいいがたく、更なる検討が必要と考えられる。

第2の自己意識尺度については、Fenigsteinらの原典版と予想以上に近似した因子分析結果となった。全体として因子構造は明快であり、男女における構造的差違はみられなかった。翻訳によるニュアンスの違い、及び背景となる文化の違いを超えてこのような結果となったのは、単に尺度自体の妥当性を示すだけでなく、自己意識そのものの普遍性を示すものとして興味深い。

第3の、両尺度の相互関係については、羞恥傾性が対人緊張的自己意識によってある程度までは説明でき得るという結果となった。同時に、男子の羞恥が相対的に対自的であるのに対し、女子のそれが対他的自己意識に起因する傾向がみうけられた。

あくまで相対的意味でだが、羞恥心性のなかに、男性が自己を「見る」存在と意識し、女性が他者から「見られる」存在であると意識する傾向が示唆されることに、根強い文化的背景の存在を感じざるをえない。

### 参考文献

- Benedict, Ruth. (1967). *The chrysanthemum and the sword*. Boston, Houghton Mifflin. (長谷川松治訳, 1967, 菊と刀: 日本文化の型, 社会思想社).
- Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Buss, A. H. (1986). *Social behavior and personality*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Jones, W. H., Cheek, J. M & Briggs, S. R. (1986).

*Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum.

- 水田恵三(1987) 自己評価に及ぼす客体自覚の影響 実験社会心理学研究, 27, 59-67.
- 押見輝男, 渡辺浪二, 石川直広 (1985) 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, no.28, 1-15.
- 作田啓一 (1972) 価値の社会学, 岩波書店.
- Sartre, J. P. (1943). *L'être et le néant*. Gallimard, (松浪信三郎訳, 存在と無: 現象学的存在論の試み, サルトル全集, 人文書院).
- 堤 雅雄 (1983) 羞恥論への予備的考察 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学篇), 17, 1-7.
- 堤 雅雄 (1986) はずかしがりやであること; 青年期の自我の一樣相として 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学篇), 20, 1-6.
- Zimbardo, P. G. (1977). *Shyness: What it is, what to do about it*. Addison-Wesley.